

わたしはわたし

中一

「ごめんね……、ごめんね……。」

と言われ、母からは、

「ちやんとした足に産んであげられなくてごめんね……。ママが代わってあげられるのなら代わつてあげたい……。」

人間は、だれもが同じではありません。勉強が得意な子がいれば、運動が得意な子もいます。背が高い子がいれば、低い子もいます。私たちはみんな違うからこそ個性があり、特別な存在なのです。

私は生まれつき第四趾短縮症（だいよんしたんしゆくしよう）という疾患があり、両足の薬指が他の指に比べて関節一つ分短いです。この疾患は原因不明と言われていて、〇・〇二パーセントから〇・〇五パーセントの確率で発症するそうです。小さかつた頃はあまり目立たなかつたけれど、

「Aの薬指、短いよね。」

と言われたことです。相手は深い意味がなくとも私はビクツとしてとても傷付きました。それまで両親以外に足の指について話したことはありませんでした。なぜならバカにされたり、差別されたりすることが嫌だつたからです。そのときに言った友達は何とも思つていなくても、言われた私はその一言で傷付きました。その経験から、人と話

小学校四年生くらいから気になりはじめ、地元の整形外科を受診しました。その病院では症例が多く、四肢先天異常専門の先生の所へ通うことになりました。そこでは骨や関節の検査だけではなく、血液や内分泌の検査もしました。でも異常は見つからず、父が同じ第四趾短縮症だったので遺伝だろうと言われました。そのとき、父からは、

すときには言葉に気を付けるようにしています。一言でだれかを傷付けてしまうかもしれないからです。

主治医の先生からは、この疾患は日常生活に支障はないけれど、見た目を治す方法は手術以外ないと言われました。手術をすればみんなと同じ足の指になりますが、一ヶ月入院してその後も一年間は運動ができなくなります。私は悩みました。今までプールに入るときやサンダルを履いているときは人に見られることが恥ずかしくて、ずっと治せるものなら治したいと思つていました。人と同じになりたかったのです。でもいざ手術の話を聞くと、すぐに「お願いします。」とは言えませんでした。父も母も手術に関しては賛成も反対もしませんでした。どちらを選んでも「力になる。」「何でもするから。」と言つてくれました。

私は中学生になつたら運動部に入りたい、スキーライ学校や修学旅行もみんなと一緒に行きたいと思っていました。でも、手術をしたら運動部には入れないし、スキー学校も修学旅行も自分の足で歩いて行けるか分かりません。

私はたくさん考えて、自分の意志で手術をしな

いと決めました。足の指のことは勇気がいるけれど、隠さず堂々としていこうと決めました。人と違うことは恥ずかしいことではない、ということが分かつたからです。

私の好きな言葉に「みんなちがつて、みんなない」という言葉があります。この言葉は金子みすゞさんの詩『私と小鳥と鈴と』の一文です。私は「あなたはあなたでいい」という意味だと思います。よく聞く言葉と思わわれがちですが、足のことを気にしていた私にはその言葉が響きました。みんなそれぞれ違うからこそよさがあると思いません。この言葉を知つて私は勇気をもつことができました。また、人と比べることで「自分で自分を傷付けている。」ということに気付きました。他の人と比べる必要なんてないのです。なぜなら私は他のだれでもない私なのだから、比べても意味がないのです。

この金子みすゞさんの詩に出合えたことで、周りの目を気にせず自分らしく生きる、という前向きな気持ちになることができました。

私は自分自身を大切にし、だれかと比べるのでなく、私らしく輝いていきたいと思います。

「わたしはわたし
人たちも大切にし、
していきたいです。」

なのだから。そして、周りの
人と人とのつながりを大切に